

第一工科大学キャンパスの バリアフリー計画に関する基礎的研究 その2 キャンパス利用者質問紙調査

辻 潔

第一工科大学 工学部 建築デザイン学科 (899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2)

Daiichi Institute of Technology campus Basic research on barrier-free planning Part 2 Campus user questionnaire survey

Kiyoshi TSUJI

1-10-2 Kokubuchuo, Kirishima City, Kagoshima Prefecture, 899-4395, Japan

Abstract: Making buildings barrier-free is an important concept for improving the comfort and maintenance of buildings. However, the current state of barrier-free research for buildings is that objective evaluation criteria for actual measurement surveys are not well developed, that barrier-free plans are not sufficiently considered in the operation and management of facilities, and that barrier-free laws are not widely known and implemented. It can be said that this has not been done.

Therefore, the purpose of this research is to create a barrier-free university that is accessible and can be used freely by people with disabilities by solving various barriers, which is one of the issues on the Daiichi University of Technology campus. And so.

As a research method, we conducted a measurement survey and a campus user survey to understand the current status of obstacles in campus buildings and the awareness and needs of users.

As a result, actual measurements revealed that the building had many physical obstacles and was difficult for wheelchair users to use.

In addition, the user awareness survey revealed that there are differences in the way people think about disabilities by grade level, subjective trends in the content of disabilities, and the potential for various psychological barrier-free efforts in addition to physical barrier-free efforts. Understood.

Key word: Barrier-free、user questionnaire survey、University、Basic research

1. はじめに

第一工科大学校舎は1960～1970年頃竣工の歴史のあるキャンパスで、建物として大学関係者はもとより、地元の人たちにも愛されている。しかしそんな親しみのあるキャンパスも、時の経過とともに、構造的、設備的に時代に合わなくなってきたと日頃の大学生活を通して感ずる。

特にキャンパス内を移動する場合に課題となるのが、水平移動と垂直移動である。現在、本学には昇降機設備、スロープ等が不足している。

また当分野の研究もまだ十分に整備されているとは言えず、大学のバリアフリー化に対する取り組み状況も把握されていないのが現状である。²⁾

2. 目的

そこで、将来を見据えて、大学の様々な障害を減らすことを目的に、基礎的研究を進め、本学独自のキャンパスバリアフリー計画を考案し、快適なキャンパスを実現したいと考えている。

そして本研究は鹿児島県霧島市に位置する、第一工科大学キャンパスにおける課題の一つである、様々なバリアの解決を通して、アクセシビリティのある大学、障害を持った人々が自由に利用できる大学を実現することを目的とし、その2として質問紙による利用者調査を行い、現状の把握を行うこととする。

3. 既往研究

バリアフリーに関する既往研究としては、千葉工業大学の塚越らはバリアフリー環境を障害学生を含めたユニバーサルな環境づくりと考え、家具・設備等のハード面と、人的サポートによるソフト面の両面からその実態を明らかにし、改善を試みている。¹⁾

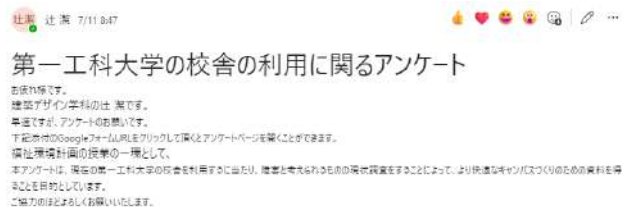
4. 大学利用者調査概要

利用者調査の意図・目的は、現在の第一工科大学の校舎を利用するに当たり、障害と考えられるものの現状調査をすることによって、利用者のバリアフリーに対する意識、問題点、改善点等を拾い出し、より快適なキャンパスづくりのための資料を得ることを目的とした。調査の種類としては、質問紙（web上のフォーム）を用いた定量調査とした。

調査対象者は、学生、教職員、その他本大学のキャンパスの利用者である市民である。本大学キャンパスの潜在的利用者としての市民は、本学学生にとどまらず、霧島市民、鹿児島県民など広範囲の人々に及ぶが、今回は、実査の制約上、実際に本学を利用する市民に限定して調査対象とした。

調査期間は2023年7月10日(月)から2023年9月30日(土)とした。

調査依頼方法は、学内者においては学内メールにより2023年7月10日から調査依頼を開始した。また一般市民に対しては本学実施の公開講座において対面で依頼をした。以下依頼メール文である。



資料-1 質問紙調査依頼メール

回収方法は、1. インターネット調査方法および2. 質問紙による直接記入方式とした。

また、本調査はインターネットにより行ったため、対象者としてインターネットを利用して回答しか得られないというサンプルの属性としての制約がある。この点は本調査の限界と考えられる。

今回の質問紙調査の有効回答数は、109件であった。

以下に今回調査で使用した質問紙（web フォーム）を示す。質問項目は全部で 12 項目である。

第一工科大学の校舎の利用に関するアンケート

本アンケートは、現在の第一工科大学の校舎を利用するに当たり、障害と考えられるものの現状調査をすることによって、より快適なキャンパスづくりのための資料を得ることを目的としています。ご協力のほどよろしくお願いたします。

※回答締め切り…2023年9月30日(土)23:59まで。

※なお当該アンケートについては、プライバシー保護の観点から、ご記入いただいた個人情報は、上記の利用目的のみに使用し、第三者に提供することはありません。

1 あなたのご年齢 ※その他欄は年齢を記入して下さい。*

18歳
 19歳
 20歳
 21歳
 22歳
 23歳
 その他...

2 あなたのご性別*

男性
 女性
 その他...

3 あなたのご所属*

第一工科大学の学生
 その他の大学生
 教職員
 その他...

4 あなたのお住まい*

福島市内
 福島市外

5 あなたにとって、今現在、第一工科大学で障害と感じる場所がありますか。*

ある
 ない

6 上記5の回答で「ある」とお答えくださった方にお尋ねします。具体的に大学内の場所を書いて下さい。

記述式テキスト（短文回答）

7 上記6の回答にお答えくださった方にお尋ねします。あなたはその障害を取り除きたいと思いませんか。

はい
 いいえ

8 上記7の回答にお答えくださった方にお尋ねします。あなたは、これまでに第一工科大学内の障害を理由に行動等断念した経験はありますか。

ある
 ない

9 あなたは、バリアフリーという言葉をご存じですか。*

知らない 1 2 3 4 5 詳しく知っている

10 あなたが第一工科大学の校舎にあつたらいいと思う福祉用具はありますか。(複数回答*可)

スロープ
 エレベーター
 段差解消機
 階段昇降機
 廊下手すり
 便器用手すり
 その他...

11 あなたは、今後、第一工科大学のバリアフリー化を行う必要があると思われるか。* 下記の1から5でお答えください。

少し思う 1 2 3 4 5 非常に思う

12 あなたが考える、第一工科大学のバリアフリー化について、どのような取り組みが必要* だと思いませんか、具体的にご記入下さい。

記述式テキスト（長文回答）

資料-2 質問紙

5. 質問紙調査結果

主な集計結果は以下の通りである。各集計結果についての考察は次章で行うこととし、本章では、端的な集計結果の提示のみおこなう。

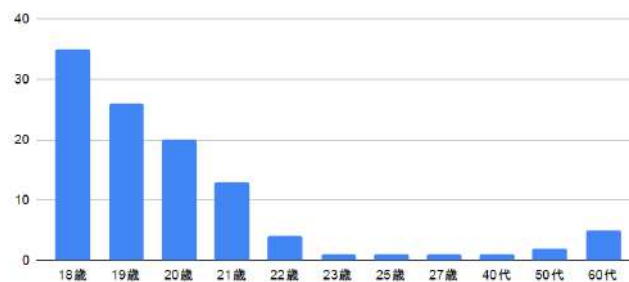


図-1 1. 年齢別対象者数

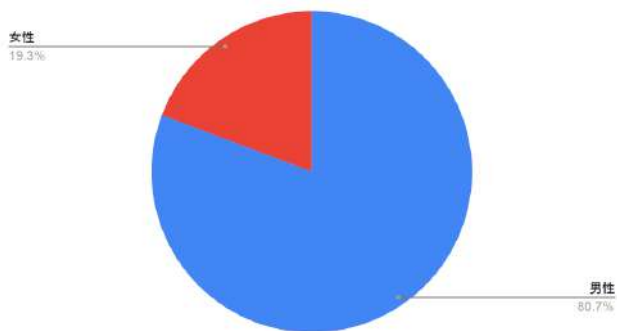


図-2 2. 性別集計

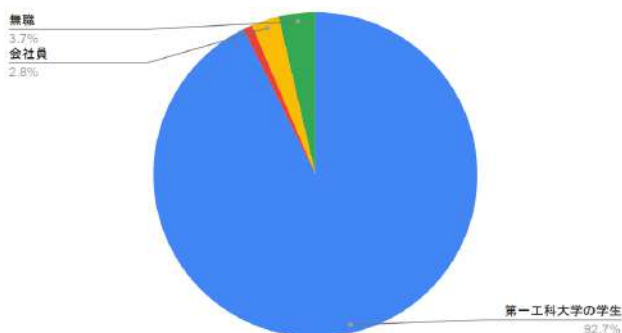


図-3 3. 所属

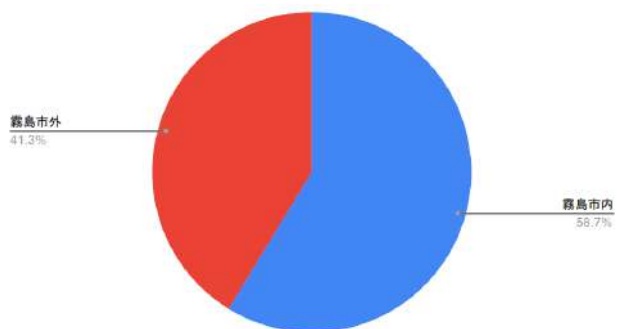


図-4 4 居住地

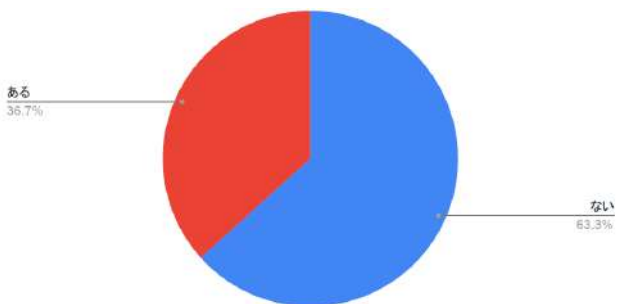


図-5 5. 第一工科大学で障害と感ずる場所がありますか。

また、上記5の回答で「ある」とお答えくださった方のみにお尋ねした、具体的な大学内の場所は以下の通りでした。

主な共通項目

- ・5階までであるのにエレベーターがない
- ・1,2号館の階段
- ・校舎間の移動
- ・構内の路面が凸凹している。
- ・構内で坂や段差があり、急な坂がいくつかある。
- ・全ての校舎が渡り廊下で繋がっていない。
- ・ドアが立て付けの悪い場所がある。
- ・場所によってドアと廊下に段差があって転びそうになる。

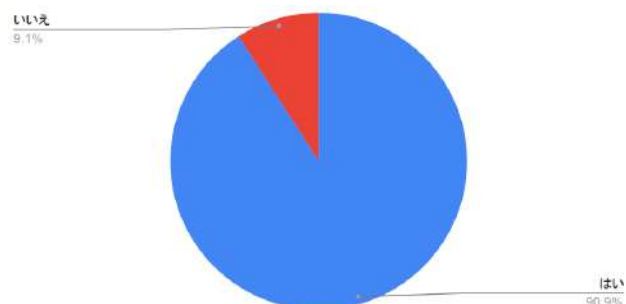


図-6 6. 上記5の回答でお答え下さった方で、その障害を取り除きたいと思いませんか。

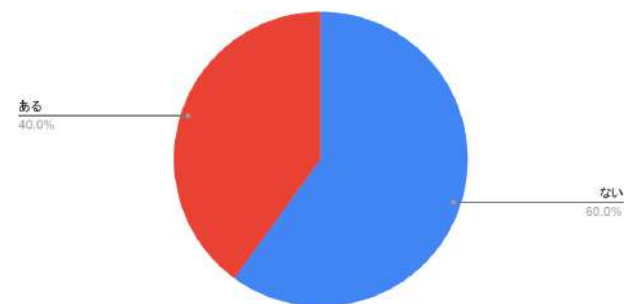


図-7 7. 上記5の回答でお答え下さった方で、その障害を理由に行動等を断念したことがあるか。

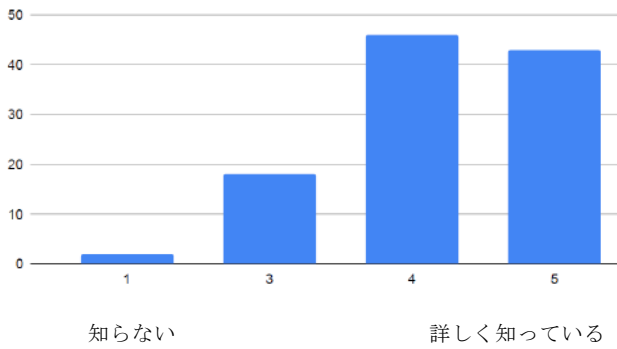


図-8 8. バリアフリーという言葉をご存じですか

「10 あなたが第一工科大学の校舎にあったらいいと思う福祉用具はありますか。(複数回答可)」のカウンタ数

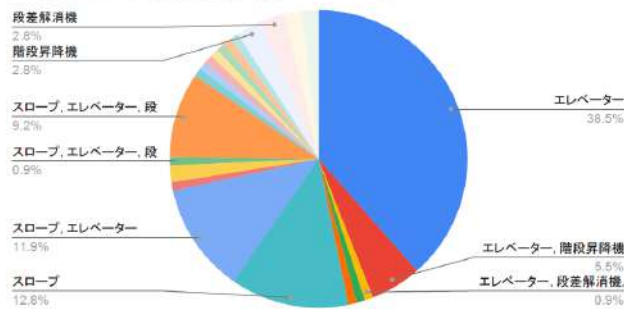


図-9 9. 第一工科大学の校舎にあったらいいと思う福祉用具

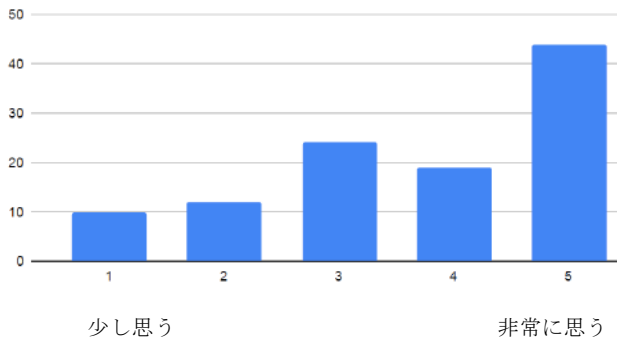


図-10 10. 今後第一工科大学のバリアフリー化を行う必要があるか

6. 考察

キャンパス内に障害がないと答えた人と障害があると答えた人の年齢層の違いについて、図-11・12より1年生(37.7%)はキャンパスを利用して4か月あまりで、障害の存在を障害と考えていない傾向がある。しかし図-12では、障害と考える2・4年生の割合の増加傾向がみられる。2年生(赤色)1.5倍、4年生(緑色)は2.8

倍。これよりバリアフリー化を望むまでに1~2年の時間を有することがわかった。

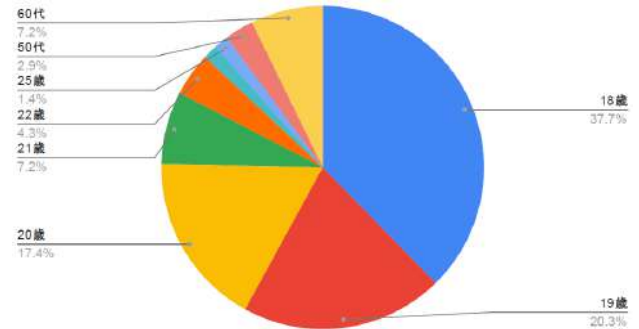


図-11 障害がないと答えた年齢別人数

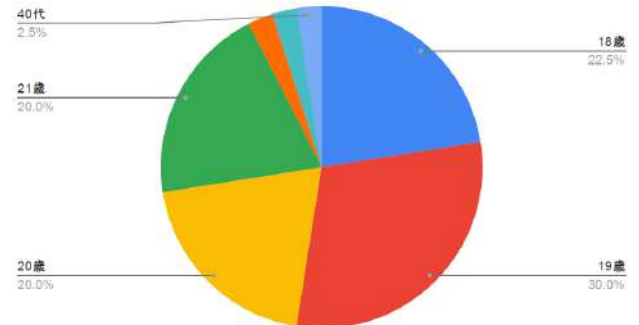


図-12 障害があると答えた年齢別人数

また、図-13より障害と感ずる場所があると答えた人の割合が36.7%とあり、この数字は2年生と4年生の割合とほぼ一致する傾向を示した。しかし障害の内容が全員一致するとは限らない。

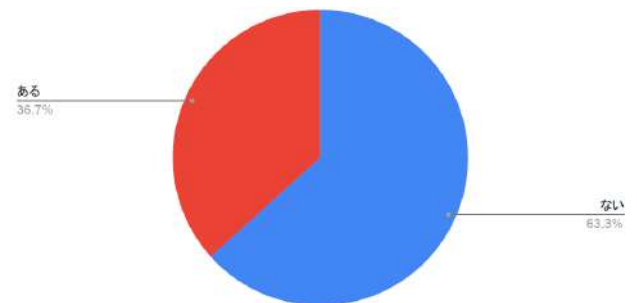


図-13 5. 第一工科大学で障害と感ずる場所がありますか。

次の質問6の具体的な場所の回答より、障害の内容に主観的な傾向がみられた。例えば、1. エレベーターがない、2. 校舎間の移動、3. 路面が凸凹している、4. 校舎が渡り廊下で繋がっていない、5. ドアの立て付けが悪い場所がある、6. ドアと廊下に段差があり転びそうになる、などであった。

また、質問紙調査に答えるインセンティブは、少しでも大学が良くなるのではないかという点が考えられる。自由回答にそれが表れていた。

例えば段差などを改善することによってみなが快適に過ごせるようになるのではないか、大学を利用する人すべてに意識改革が必要である、意見を出し合って授業の一環として議論するなどであった。物理的なバリアフリー化だけではない様々な心理的なバリアフリー化の潜在化があることがわかった。

7. まとめ

本研究の目的は、様々なバリアの解決を通して、アクセシビリティがあり、障害を持った人々が自由に利用できる大学を実現することが目的であった。第一工科大学を例としてバリアフリー環境の現状調査、分析、考察を行ったことで、より具体的な問題点を抽出することができた。建築物のバリアフリー化問題は、今日の日本における大きな社会問題となっている。本研究の社会的意義は、具体的な問題点及びその改善案を明らかにしたことによって、本学キャンパスに限らず学校施設や公共施設にも応用できることである。同じ問題を抱える関係者に、是非この論文に目を通していただき、少しでも参考になれば嬉しく思う。

8. 今後の課題

本研究では主に足の不自由な人や車いす利用の障害に着目し、その1では様々な段差の改善案についての検討を行ったが、障害にも様々な種類があり身体障害だけでも視覚障害、聴覚障害、その他多岐にわたる。したがって実際に段差が解消

されただけではまだバリアフリーな大学とは言えない。

本学キャンパスが抱えるバリアフリー化への課題は膨大にあるため、なかなか行動に移せないのが現状である。しかし、まずは小さなことから少しずつ、時間をかけて継続することがやがて大きな結果に繋がるのではと考える。

今はバリアだらけであっても一つ一つ解決し、改善して、地道な作業の積み重ねによってバリアフリー化が実現すると考える。

最後にこの研究をきっかけに第一工科大学がバリアフリーを実現する大学の先駆的モデルケースになることを期待する。

参考文献

- 1) 塚越理恵・上野義雪、5443 千葉工業大学におけるバリア・フリー環境の実態調査 その2、日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)2001年9月 pp885-886
- 2) 有賀絵理、茨城大学教育施設のバリアフリー改善案、茨城大学地域総合研究所年報、2004年、No37, pp71-82